



# ごあいさつ



最近「遊び」を知らない子どもたちが増えている、とよく言われます。確かに、少なくなる広場、劣悪な交通事情、核家族化など、子どもたちの自由な遊びを阻害する要因は増えるばかりです。また、保護者からも、将来の受験のことを考えると、遊んでばかりいる癖がついてしまっているのだから、という意見をいただくこともあります。しかし、遊び場がないからといって、へんな癖がつくかも知れないといって軽視していいほど、「遊び」は子どもたちにとって必要なものなのではないでしょうか。答えはもちろん「NO」です。むしろ子どもたちにとって「遊び」ほど重要なものはありません。もっと強い言い方をすれば、子どもたちの生活はすべて「遊び」である、と言うこともできます。

文部科学省もこのことには注目していて、幼稚園教育要領では、「幼児の自発的な行動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として……後略」（幼稚園教育要領第1章総則第1幼稚園の基本2.）と明記しています。

それでは、幼児の「遊び」とは一体何なのでしょう。例えば雨が降った翌日、公園に大きな水たまりがあったとします。大人たちにとっては単なる邪魔な水たまりであって、「子どもたちが濡れないように早く乾いてしまえばいいのに」と思われているに過ぎない存在ですが、子どもたちにとっては未知の大きな遊び道具になり得ます。

子どもたちは一体どのように遊ぶのでしょうか。

- ①長靴でずかずか入ってみる。
- ②石を投げ入れてみる。
- ③木の葉っぱを浮かべてみる。
- ④川を掘って排水溝に水を流してしまう。
- ⑤泥だんごを作ってみる。

子どもたちは、大人以上にたくさんの「遊び」を思いつくのですが、ここにあげた数少ない「遊び」の中にも学ぶべきことは多く含まれているのです。

- ①水の中は外よりも歩きにくい。
- ②石を投げ入れると波ができ、その波は対岸まで届いていく。
- ③石は沈んでしまうが、葉っぱは浮かぶ。
- ④水は高い所には流れず、低い所に流れる。
- ⑤乾いた土は固まらないが、濡れた土は固まりやすい。

もちろん私たち大人はこれらの現象のことを知っていますし、各々を説明することができます。しかし子どもたちにとっては、波のことや、浮力のことや、表面張力のことや、万有引力のことを実体験する素晴らしいチャンスであり、これらの「遊び」を経験することは、確実に将来の学習に有形無形の好影響を及ぼしていくのです。同時に主体性をもって「遊び」に取り組むことによって、子どもたちの柔軟性ある脳細胞が刺激を受け、考える力がついていくものなのです。

私たち国風第一幼稚園では、子どもたちの「遊び」を大切にしています。子どもたちが主体性をもって十分に遊ぶことができるように、いろいろと心を砕いています。もちろん、幼稚園生活が「自分勝手」な「遊び」だけで構成されてはいけないうのであって、それに関わる教員は、子どもの「遊び」について熟知して、子どもたちの「遊び」をより高き所に結びつけるように常に努力をしています。そして同時に、幼稚園時代に当然学ばねばならないこと、基本的な生活習慣や小学校で学ぶことの基礎は学んでおかなければなりません。しかしながら、それらの活動も、常に子どもたちの食べやすい「遊び」という表皮に包まれていなければならない、と私たちは考えているのです。子どもたちはその内包する教育効果を知らず知らずに食べて成長していくべきなのです。

振り返って、現在の幼稚園教育の実態を見ると、あたかも生の材料や、子どもたちが到底到達できない高いレベルのものを提供することが高級な教育のようにとらえられ、また、保護者の皆さまもそれを歓迎するといった、困った風潮があるようです。生の材料を無理矢理食べさせられて消化不良を起こしている子どもたちや、方法論の誤りから、材料の本当に食べてもらいたいところを残してしまう子どもたちを見るにつけ、私たちを含めた幼児教育者全体が、もっともっと子どもたちのことを考えた保育を行っていかなくては、と思う次第です。